

書 評

個々の内容について問題と感じた点がないが、スペースの関係でその点についてのコメントは省略させていただきたい。

このような本の刊行に際しては、限られたスペースのなかで、教育社会学の知見のうち、どのような内容を各章に盛り込むかが各分担執筆者に任されることも多く、そのため内容にばらつきがみられる本も少なくない。その点では、本書も各章の説明の内容やレベルが必ずしもそろっているとはいえない。しかし、これまで教育社会学の分野でマクロな観点から明らかにされてきた研究成果や課題を、比較的要領よく織り込んでいるといってもよいように思える。また、章によって若干異なるが、教育社会学を初めて学ぶ人にもわかりやすいように、テクニカル・タームについて簡潔な説明がなされていたり、情報化、国際化、高齢化そのものについても、実情の解説にもかなりのスペースが割かれている。そこに編者の編集のねらいと本書のもうひとつ

の特色を見ることができる。概論書としてみれば、マクロな社会変動と教育との関連を理解するための比較的わかりやすい内容を備えているという点では、本書は評価できる。というのは、教育社会学のテキストとして書かれた本のなかには、やたらと専門的で難しかったり、学生にとって不親切でわかりにくいものが少なくないからである。おそらくそのひとつの理由は、執筆者が執筆内容を通じて、自らの専門性や研究水準の高さを示したいという研究者としての欲求に駆られること、そのために学生の理解を助けるというサービスに徹することができないためであろう。家族と社会化などミクロな教育社会学の側面についての内容を欠いているのは惜しまれるが、ともあれ、教育社会学を学ぶ学生や、教育社会学以外の教育の専門家にも読みやすい書物が1冊増えたことを良しとしたい。

◆A5判 224頁 2,427円(税別)

創森出版

■ 書 評 ■

矢島正見 著

『少年非行文化論』

梶山女学園大学 林 芳樹

本書は、ほぼ20年間にわたって著者が発表してきた論文を、「少年非行文化論」のタイトルで単著としてまとめたものである。ただ、本書の場合、単なる過去の論文の寄せ集めではなく、初出一覧によると、全面的な改訂を含めて、それぞれ

の論文は、大幅に手が入れている。こうした著書を読む楽しみのひとつは、個々の論文の内容とは別に、研究者の変容の過程が、垣間見られることにある。

本書は、序章、終章を含めて、4部構成、全15章、360頁余りからなる大著であ

る。「理論再考」と題された第1部は、比較的初期の論文3編からなり、第1と2章は、著者の研究の理論的パースペクティブを提供していると思われるデュルケムのアノミーとエゴイズム概念、およびマートンのアノミー状況への適応様式類型の検討にあてられている。第3章では、調査に基づく実証的研究の全体的枠組みが提示され、その枠組みにそって、非行促進要因を考察した第2部(第4～7章)、非行抑止要因を対象とした第3部(第8～10章)がおかれている。『『非行』の解説』と題された第4部では、社会問題の構築主義的視点から、「犯罪報道」「有害コミック規制運動」「弁護士の非行少年観」(第11～13章)が考察の対象とされている。

長年の地道な調査に基づいた個々の論考は、著者も述べているように、あらかじめ一貫した枠組みのなかでまとめられたわけではないために、基本的には独立した内容となっている。しかし、その基本的視点からすれば、タイトルに示されるように、現代社会が青年期に課す文化的状況から青少年の逸脱行動を説明しようとしている。著者が念頭に置く現代社会の文化的状況とは、デュルケムのいう個人主義社会における「エゴイズム」と「アノミー」状況である。著者によると、前者は、共同体意識から分離した自我意識の肥大化によってもたらされる「生きる意味を探し求めるという宿命」であり、後者は「自己の欲望に苛まれるという宿命」である。こうした全体社会の文化的特徴は、今日の青年文化の状況にもあてはまるのであって、青少年の逸脱行

動は、青年文化のなかに存在するこの2つの宿命に対する、彼らの多様な適応行動のひとつとして位置づけられている。

こうした全体的視点が、個々の論考にどのように接続されているのか、少しわかりにくいのだが、研究枠組みを提示している第3章からみるかぎり、次のようにまとめられるだろう。具体的研究において著者が依拠するのは、デュルケムのアノミー論というよりむしろマートンのそれである。後者の「文化的目標」と「制度的手段」の「ずれ」といった周知の図式を、今日の日本の教育状況に当てはめることで、こどものおかれた状況を「アノミー教育状況」と診断する。そこでは、社会的成功という文化的目標を特権化しながら、それに到達する制度的手段を学校教育が独占し、選択的に提供することによって、アノミー状況が産み出される。そうした状況において、多くの者は、文化的目標のレベルを引き下げることによって「ほどほどの」成功に甘んじている(儀礼主義)。しかし、社会的成功という文化的目標も、教育という制度的手段もともに受容しない(できない)者は、「逃避主義」的適応様式をとる。著者によれば、「この少数派の『逃避主義』的生徒こそ、現在の非行少年の典型」(58頁)である。したがって、こうした「アノミー教育状況」が「少年を非行へと追いやる要因」なのである。他方、「少年を非行へと誘う要因」としては、青年文化の一側面である「青春文化」が取り上げられる。「青春文化」なる用語は、著者独自のものと思われるが、要するに、友人関係や「遊び」といった、いま・ここでの生活を

楽しむといった享樂的傾向をもつ文化であり、そうした文化のなかに、非行へと誘う要因となる逸脱性の強い要素が含まれている。しかも、「アノミー状況」におかれた今日の学校のなかに、こうした反学校的な「青春文化」が浸透することによって、「逃避主義」のこどもへの誘惑がいっそう増大している、という診断である。細部を捨象していえば、教育における構造的緊張と逸脱的下位文化から「非行促進要因」を析出しようとする馴染みの図式である。この枠組みのもとで、「遊び型非行」(第4章)、「生徒文化と非行少年像」(第5章)、「青年期の二面性」(第6章)、「有害環境と非行」(第7章)が検討されている。「非行抑止要因」に関して、同じく、研究枠組みの紹介は省くが、「非行少年の適応と自己概念」(第8章)、「中学生の友人関係と非行」(第9章)、「中和と非行」(第10章)などが論じられている。

各章での論点には、興味深い知見が散見されるのだが、個別の内容に触れる余裕がないので、全体的な感想だけを記しておきたい。通読して気になるのは、初期に書かれた論考(たとえば、第1章「エゴイズム論考」)と最近のそれ(たとえば、終章「『心』と『性』」)との落差である。デュルケミアンを自認する著者にとって、デュルケムのアノミーとエゴイ

ズム概念は、その後の研究の出発点といえるものであろう。事実、手直しされたとはいえ、「エゴイズム論考」では、思想史のなかでのデュルケムのエゴイズム論の位置づけなど、著者の意気込みが感じられ興味深く読むことができた。しかし、最近に書かれた終章においては、そうした緊張感がほとんど感じられず、一般向けの講演としか読めないのは、評者の読みの浅さだけの問題なのだろうか。というのも、評者とは逆に、著者自身は、初期(おそらくは第1章)の理論的論文について、「若気の至り」とか「壮大な夢を追っていた」という否定的ともとれる発言をしているからである。年齢とともに理論的関心が薄らいでいく傾向が教育社会学の一般的傾向であるとはいえ、社会的加齢の効果は、研究においては、むしろマイナスにはたらくのではないだろうか。特定の研究の場に同化し、そこでの地位を確立していく過程は、無意識のうちに、その場のドクサに巻き込まれる過程と表裏一体であり、それを避けるためにこそ理論的反省が常に必要とされるのではないか。これは自戒を込めて言っているのであって、「実証主義」に自信をもつ著者にとっては、こうした疑問は、解決済みの問題なのかもしれない。

◆A5判 360頁 4,000円(税別)

学文社